

【研究ノート】

診療情報管理系基礎演習におけるグループワーク及び LTD話し合い学習法の導入

—— 求められる診療情報管理士育成を目指して 第一報 ——

A Report on the Introduction of the Learning through Discussion (LTD) Method in the Health Information Management Basic Seminar Group Work

—— Fulfilling the Educational Needs of Health Information Managers ——

上門 要, 大城真理子, 木村 堅一

要旨

本研究は、名桜大学国際学群2年次を対象とした「診療情報管理系基礎演習」において、従来の講義形式と並行してグループワーク導入を行った実践報告である。社会が求める人材を育成するため、平成23年度よりグループワークを導入したが、特定の学生に負担が集中するグループが発生していた。改善として、平成24年度に学生の個人活動を促進させるとともに、個々の活動を評価する目的として「学習ポートフォリオ」を導入した。「学習ポートフォリオ」は、学生個人の学習プロセスを記録することにより、自分を客観的に見ることができ、教員にとって学生の活動を多面的に評価することができるメリットがあった。また、「学習ポートフォリオ」より学生は、得た情報をうまく活かすことができなと感じていることが判明した。そこで、平成25年度より協同学習を基盤とした学習法「LTD話し合い学習法」を導入し改善を行った結果、学生の予習状況の改善がみられた。今後も協同作業を中心とした学習法を検討していく。

キーワード：協同作業, 協同学習, グループワーク, LTD, 主体的

I. はじめに

近年、大学教育において行われている人材育成と企業が大学へ求める人材育成に乖離が生じている。駿台教育研究所、産経新聞社(2012)『「時代が求める人材像」に関する調査結果』によると、人材育成の取り組みにおいて大学が重点を置いている教育は「専門分野の知識の養成」・「職業観・職業意識の醸成」であるのに対し、企業が大学に望みたい教育は「コミュニケーション能力」・「理論的思考力や論理的理解力の養成」であった。また、文部科学省中央教育審議会から答申された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会, 2012)において、生涯にわたって学び続ける力・主体的に考える力を持った人材は、受動的な教育の場で

は育成できないため、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習(アクティブ・ラーニング)への転換が必要であると指摘されている。

グローバル化が進む社会の中、大学教育において社会が求める人材の育成が求められている。著者らの所属する名桜大学では、コミュニケーション能力・批判的読書能力を重視し広い教養教育すなわち「名桜型リベラルアーツ」を強化している(名桜大学『大学概要2013-2014』)。名桜大学国際学群において1・2年次までは3年次における主専攻決定の準備期間として教養教育科目を中心に履修を行うが、その中において診療情報管理士を目指す学生は、1年次から診療情報管理に関する専門科目の履修を行っていく。診療情報管理士を目指している学生の傾向として、何事にも真面目に取り組むことが出来、目標を決めると、それに向かって計画を立て行動

することが出来るということが挙げられる。また、個別に意見を求められると、自らの考えを述べる事が出来る学生が集まっている。同じ目標を持った学生同士が集まり学ぶ機会が多くあるにも関わらず、個人で活動することが多く、積極的にお互いに情報を共有したり話し合いをしたりするなど、コミュニケーションをとる学生が少ない。

しかし、学生の目指している診療情報管理士の業務は、診療情報の内容精査を行い、精度の高い情報管理を行うとともに、その情報に基づき高機能なデータベースの構築とデータの活用を担っている（日本病院会、2012）とされており、また日本診療情報管理学会（診療情報管理業務指針）によると診療情報管理士の業務として、各診療部門からの診療情報データを把握できる立場にあり、職種間の情報共有の支援者として業務の円滑な遂行を図るという重要な役割を担っている、とされている。その為には、コミュニケーション能力の向上・チームワークの重要性の理解が求められる。1年次の教養演習にて行っているグループワーク・協同作業を2年次における専攻系基礎演習で行うことが必要であると考えられる。

II. 「診療情報管理系基礎演習」の紹介及び実践報告

平成21年度4月の診療情報管理専攻開設に伴い、平成22年度より開講されるようになった診療情報管理系基礎演習は、当初15回を講義形式とし診療情報管理に関係する分野を診療情報管理専攻の教員だけでなく他専攻（経営専攻、情報システムズ専攻）の教員による専門の視点からの講義内容を行っていた（表1）。

表1 平成22年度授業計画

週	内 容	教室
第1週	オリエンテーション	講義室
第2週	講義：診療情報管理の業務1 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室
第3週	講義：診療情報管理の業務2 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室
第4週	講義：情報管理1 (担当：情報システムズ教員)	講義室
第5週	講義：情報管理2 (担当：情報システムズ教員)	P C ルーム
第6週	講義：データベース1 (担当：情報システムズ教員)	講義室
第7週	講義：データベース2 (担当：情報システムズ教員)	P C ルーム
第8週	講義：診療情報管理3 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室
第9週	講義：診療情報管理4 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室

週	内 容	教室
第10週	講義：医療情報学1 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室
第11週	講義：医療情報学2 (担当：診療情報管理専攻教員)	講義室
第12週	講義：医療統計学 (担当：経営専攻教員)	講義室
第13週	講義：コミュニケーション・スキル (担当：経営専攻教員)	講義室
第14週	講義：社会保障制度と医療 (担当：経営専攻教員)	講義室
第15週	まとめ	講義室

しかし、社会で求められている人材の能力は、専門知識を習得しているだけではなく、協同作業を円滑に行うコミュニケーション能力や論理的思考力である。そこで、平成23年度より講義形式の基礎演習にグループワークを導入した。各年度の取り組みの経緯は図1のとおりである。

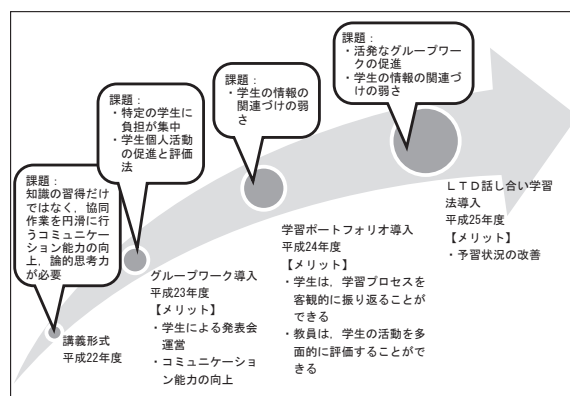


図1 診療情報管理系基礎演習の取り組み経緯

また、各年度の診療情報管理系基礎演習の担当教員数は表2、受講者数は表3のとおりである。

表2 診療情報管理系基礎演習担当教員数

年 度	教 員 数
22	診療情報管理専攻：3名 経 営 専 攻：3名 情報システムズ専攻：2名
23～25	診療情報管理専攻：3名 経 営 専 攻：2名 情報システムズ専攻：2名

表3 診療情報管理系基礎演習受講者数および教室

年度	期	受講者数	教室
22	前期	21名(男12, 女9)	中教室(96名)
	後期	14名(男8, 女6)	大教室(132名)
23	前期	36名(男16, 女20)	中教室(96名)
	後期	19名(男8, 女11)	中教室(96名)
24	前期	20名(男2, 女18)	中教室(96名)
	後期	13名(男3, 女10)	小教室(48名)
25	前期	15名(男3, 女12)	中教室(96名)

1. 平成23年度診療情報管理系基礎演習の取り組み(グループワーク導入)

平成23年度より、診療情報管理士が医療の現場で求められているチーム医療における情報の共有の中心的な存在になる為にグループワークを取り入れた。

グループの構成は、1グループ4~6名、各グループの男女比を等しくし、また1年次での演習クラスが重ならないように作成した。グループワークでは、医療に関するテーマを各グループで設定し、問題提起・解決・結論を導き出していく。その中で、他者の意見への傾聴・自分の意見の発言・ディスカッションを行う。15講の講義の内、1~3講をグループワーク、4~11講を従来通りの講義形式とし、それぞれの分野の専門の教員による講義を行った。講義とグループワークを組み合わせることにより、専門の知識を得ながらグループワークの課題に取り組むことで得られた知識と、現在行っている課題との関連づけを行いながら進めていくことができる。講義形式の場合のグループ活動は基本として講義時間外にて行い、講義時間内の15分程度を、講義時間外で行った各個人又はグループ活動の情報共有・次回までのやるべき事の確認を行う時間とした。

残り12~14講をグループワークとし、最終15講の発表会に向けてグループの意見を集約しレジュメ及び発表用スライドの作成を行った。診療情報管理系基礎演習の流れは、図2のとおりである。

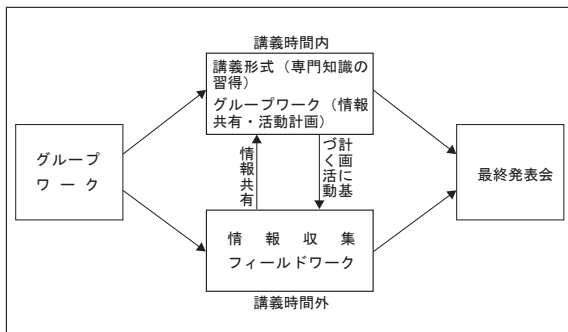


図2 診療情報管理系基礎演習の流れ

最終発表会は学生主体で行う為、各グループより運営委員を選出し発表運営委員会を立ち上げた。発表運営委員会は教員の指導下にスケジュール調整やレジュメの取りまとめ、レジュメ集(図3)の作成、当日の発表会の司会進行を行った。

2011年度・前期 ◆名桜大学
診療情報管理系基礎演習

日時: 平成22年7月27日(水)10:30~12:00
会場: 210教室

診療情報管理専攻

発表会 スケジュール		
グループ/時間	発表者氏名	発表題目
A 10:40~10:50	1410013	1410082
	1410065	1410123
	1410187	1410057
B 10:50~11:00	1410016	1410006
	1410135	1410053
	1410197	1410204
C 11:00~11:10	1410083	1410145
	1410137	1410155
	1410181	1410286
D 11:10~11:20	1410151	1410069
	1410176	1410230
	1410362	1410260
E 11:20~11:30	1410047	1410157
	1410190	1410177
	1410133	
F 11:30~11:40	1410231	1410273
	1410213	1410265
	1410267	1409016

口頭発表の方法
一発表につき持ち時間は10分です。7分発表、3分質疑応答。

発表時間の管理
1 鈴 6分 … 残り時間1分の合図です。
2 鈴 7分 … 発表時間終了の合図です。質疑応答が始まります。
3 鈴 10分 … 質疑応答の終了の合図です。次の発表者に交代します。

図3 最終発表会レジュメ集

また、学内SNS“MEIO MEMBERS”を活用し、「診療情報管理系基礎演習」のコミュニティ(図4)を作成

することで情報共有を行った。



図4 診療情報管理系基礎演習コミュニティ

このコミュニティでは、講義で配布した資料や学生へのアナウンスなどの書き込みや中間発表会、最終発表会のレジュメの提出先として活用した。コミュニティは学期ごとに作成せず、受講者は全てこのコミュニティへ参加登録を行う。そうすることで、受講時点の情報だけではなく、過去の情報（資産）を活用し、グループワーク

の進め方や課題の作成に取り組むことが出来るメリットがある。

1) 平成23年度前期を終えて

平成23年度前期より始めたグループワークでは、教員が積極的に関与するのではなく、あくまで学生が主体的に活動するよう進めていき、学生から相談があった場合や、グループ活動が進んでいないように感じた場合に声をかけ指導を行った。

前期を終えての問題点は、最終発表会までの間に活動の経過を確認する時間を設けていなかった為、最終発表会間際になって課題のテーマ自体を見直すグループもあった。

改善として後期より講義9回目を中間発表会とし、学生及び教員がグループワークの経過を確認できるようにした。

2) 平成23年度前後期を終えて

前後期ともに、最終発表会は何とか形になり、終わることが出来た。しかし、グループワークにおける協同作業では、話し合いに参加していない、担当分の作業を行ってこないなど作業を行う学生と行わない学生に分かれ、特定の学生に負担が集中するグループが発生していることが分かった。次年度に向けては、学生の協同作業の促進と、個々の活動の評価法が課題となった。

2. 平成24年度の取り組み(「学習ポートフォリオ」導入)

平成23年度と同様に講義形式と並行しグループワークを進めた。

前年度の課題としてあがった、特定の学生に負担がかなり個々の活動に差が出たことを受け、平成24年度は、個人活動を促進させるとともに、個々の活動を評価する目的として「学習ポートフォリオ」(図5)を導入した。

「学習ポートフォリオ」には、個人の学習プロセスを記録することにより、学生にとっては自分を客観的にみることが出来、思考過程・課題解決の訓練にもつながる。また、教員にとっては、個々の活動を多面的に評価することが出来るメリットがある。これにより、最終発表会終了後、成果物として提出させ個人活動の評価とした。また、最終発表会ではグループでの意見としてまとめ上げたものであるため、発表会レジュメを基本とした個人レポートの提出を行わせ、個人活動の評価資料とした。

1) 平成24年度前期を終えて

「学習ポートフォリオ」により、個人活動を記録として確認することができた。しかし、そのまとめ方には単に資料を貼り付けているだけの者・きちんとグループで

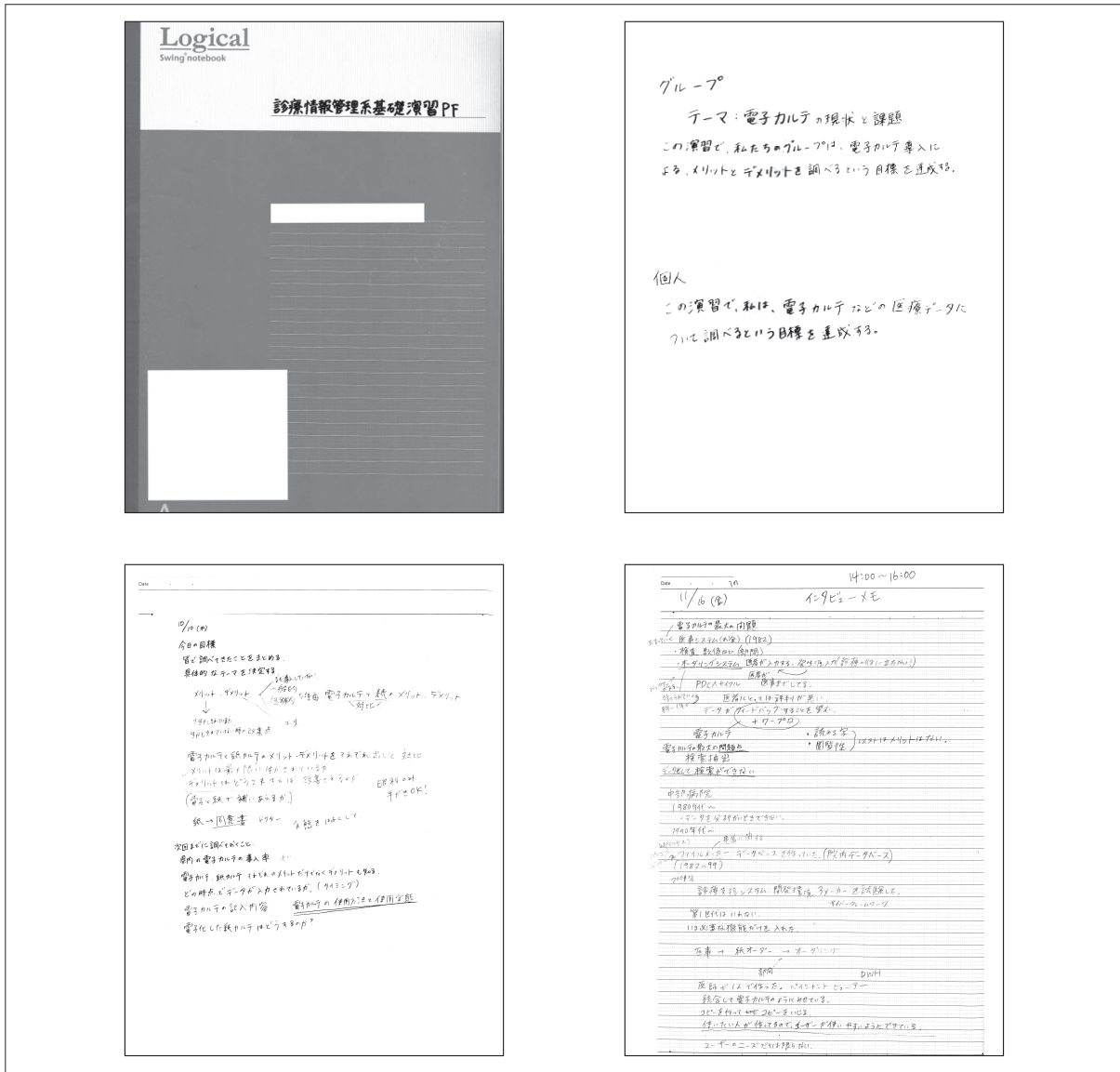


図 5 学習ポートフォリオ (参考)

のやり取りや自分の考えたことを記録し整理している者など個人差が生じていた。また、協同作業において、やはり特定の学生に負担が発生していた。協同作業においては、コミュニケーションが重要であり、お互いに相手のことを理解することや、何のために(目的)協同作業を行っているかグループ内で共通の認識が必要である。また、この演習においては個人の学習の記録となる「学習ポートフォリオ」を仕上げるために、グループ活動をきちんと行っていないと仕上げることができず、グループの評価・最終的に個人の評価につながらないとの認識を受講生に持たせることが必要である。

2) 平成24年度前後期を終えて

「学習ポートフォリオ」の導入により、個々の活動の記録を確認することができるようになった。後期は、前期に比べるとグループワークがスムーズに進んでいた。これは、後期のほうが、前期に比べ受講者数が少なくなったこと、教室が前期と比べて小さな教室を使用したため、グループの状況も把握しやすく指導もしやすかったからだと考えられる。

また、学習ポートフォリオ及び個人レポートには「今回の発表もうまく集めた情報を活用できていなかったり、情報の特徴を分かっていたりなかったりと新たに課題が見えた」「反省点は、講義でたくさんの情報を得ることができたのに、それを生かせなかったことです。」「集め

た情報をもり込んでいない、使い切っていない所があった。」という学生の記述があった。これより、学生は情報の関連付けが弱く、今まで履修してきた様々な講義の内容や、自分が経験した知識を十分に活かすことが出来ていないと感じていることが判明した。

そこで平成25年度より、協同学習を基盤とした学習法「LTD話し合い学習法」を導入し改善していくこととなった。

3. 平成25年度の取り組み(「LTD話し合い学習法」導入)

前年度の改善案をもとに平成25年度より、学生の自律的な学びの促進・協同学習を基盤とした学習法の修得を行うため「LTD話し合い学習法」を取り入れることとなった。「LTD話し合い学習法」の学習課程プランは表4のとおりである。この学習法は、話し合いが中心の学習法であるが、期待される効果を得るためには事前の予習が必要である。学生は、課題(テキスト)について予習で学んだことを「学習ポートフォリオ」に記録し作成する。そして、ミーティングでは、「学習ポートフォリオ」をもとにミーティングを行い課題の理解を深めていく(安永, 2011)。

表4 LTD話し合い学習法の過程プラン

ステップ	ステップの活動内容	配分時間
St.1	導入：雰囲気づくり	3分
St.2	語いの理解：言葉の定義と説明	3分
St.3	主張の理解：著者の全体的な主張の討論	6分
St.4	話題の理解：話題の選定と討論	12分
St.5	知識の統合：他の知識との関連付け	15分
St.6	知識の適用：自己との関連づけ	12分
St.7	教材の評価：学習課題の評価	3分
St.8	活動の評価：学習活動の評価	6分
		合計60分

安永(2011)より作成

これを踏まえ、平成25年度診療情報管理系基礎演習の授業計画を見直した(表5)。

表5 平成25年度診療情報管理系基礎演習授業計画

週	内容	分類
第1週	オリエンテーション・グループワーク	
第2週	グループワーク	読解
第3週	グループワーク	LTD話し合い
第4週	グループワーク	学習法修得
第5週	グループワーク	

週	内容	分類
第6週	講義1：診療情報管理	
第7週	講義2：表計算応用	
第8週	講義3：データベース	基礎
第9週	講義4：コミュニケーションスキル	専門知識の修得
第10週	講義5：社会保障制度と医療	
第11週	グループワーク	
第12週	グループワーク	応用
第13週	グループワーク	アンケート
第14週	グループワーク	集計・分析
第15週	グループワーク	
第16週	最終発表会	成果

1～5講を「読解」とし、『医療の限界』(小松, 2007)を課題図書に指定して、「LTD話し合い学習法」による修得を図った。6～10講は「基礎」とし従来通りの講義形式でそれぞれの分野の専門の教員による講義を受講して知識を深めていった。11～15講を「応用」としアンケート「病院リサーチクエスチョン」の分析を行った。「応用」で使用したアンケートは、平成24年度の3年次インターンシップ実践にて実習を行った先の病院について「病院リサーチクエスチョン」としてリサーチしてきたものを使用した。質問項目について結果の予測と実際の質問集計とを比較し、違いがあった場合なぜそのような結果になったのかの考察を行った。16講に「病院リサーチクエスチョン」の質問項目からグループごとにピックアップした質問項目について予測・比較・考察を行い発表した。

今年度はグループワークを通して協同作業への意識の変化を確認するため、基礎演習が始まった直後と基礎演習最終の発表会終了時にアンケート調査を行った。アンケートは長濱ら(2009)が開発した協同作業認識尺度を

協同効用(仲間と共に作業することによる有効性を示す項目)
2.()グループのために自分の力(才能や技能)を使うのは楽しい。 3.()一人でやるよりも協同したほうが良い成果を得られる。 7.()協同はチームメイトへの信頼が基本だ。 9.()みんなで色々な意見を出し合うことは有益である。 10.()能力が高くない人たちでも団結すれば良い成果を出せる。 12.()グループ活動ならば、他の人の意見を聞くことができるので自分の知識も増える。 15.()個性は多様な人間関係の中で磨かれていく。 16.()協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる。 18.()たくさん人の作業でも、みんなと一緒にやればできる気がする。
個人志向(仲間との協同を回避し、一人での作業を好む項目)
1.()みんなで一緒に作業すると、自分の思うようにできない。 5.()グループでやると必ず手抜きをする人がいる。 6.()周りに気遣いしながらやるより独りでやる方が、やり甲斐がある。 11.()みんなで話し合っているより時間がかる。 13.()人に指図されて作業はしたくない。 14.()失敗した時に連帯責任を問われるくらいなら、一人でやるほうが良い。
互恵懸念(協同作業からえられる恩恵は人によって異なることを示す項目)
4.()協同は作業の出来ない人たちのためである。 8.()弱い者は群れて助け合うが、強い者にはその必要はない。 17.()優秀な人たちがわざわざ協同する必要はない。
出典：長濱文と・安永悟・関田一彦・甲原定房(2009)．協同作業認識尺度の開発 教育心理研究, 57, No1 24-37

図6 協同作業認識尺度(3因子18項目)

もとに学生向けに一部修正したものを使用した。アンケートは5件法で行い、各項目に対し肯定的であれば高い得点となる。尺度は「協同効用」「個人志向」「互恵懸念」の3因子18項目(図6)にて構成されており、得点を算出し集計を行った。協同作業に対して肯定的であれば、協同効用因子が高くなり、個人志向因子と互恵懸念因子は低くなる。また、アンケートは意識の変化をみるため記名(集計は個人が分からないよう記号化)とした。

1) 平成25年度前期を終えて

「LTD話し合い学習法」を導入したことにより、事前に予習してこなければグループワークができないこともあり予習を促す結果となった。

前期を終えての課題は、名桜大学において診療情報管理士を目指している学生の傾向である大人しい学生が集まっていることもあり、活発なグループワーク(ディスカッション)とは言えなかったことである。

また、学生ポートフォリオ及び個人レポートの記述より「関連づけと、自分の言葉でまとめる事が苦手だと知った。」「自分の推測や考えで文章を書くだけではなく、ちゃんと裏付けをとって文章を構成すべきだった。」などの記述があった。このことから、基礎演習の前半「基礎」の部分で行った「LTD話し合い学習法」の知識(情報)の関連付けができておらず、「応用」でのアンケート集計の際に、目の前にある問題と過去に習得した知識や個人の経験と結びつけることが苦手であると同時に、「LTD話し合い学習法」で行ったことが身につけていないと考えられる。

また、この「診療情報管理系基礎演習」を通して、協同作業に対する意識にどのような変化がみられるかアンケート調査を実施した。アンケート集計対象者数は、平成25年度前期受講者15名中2回とも回答を行った14名で3因子の得点を集計し、対応のあるt検定を行った。結果、協同効用因子 ($t(13) = 0.47, n.s.$)、個人志向因子 ($t(13) = 0.44, n.s.$)、互恵懸念因子 ($t(13) = 1.75, n.s.$) となり3因子とも有意な差は認められなかった(表6)。

表6 協同作業認識尺度の平均値

		第一回	第二回	t (13)
協同	平均値	4.42	4.48	0.47 n.s.
	(標準偏差)	(0.75)	(0.77)	
個人	平均値	2.35	2.27	0.44 n.s.
	(標準偏差)	(1.04)	(1.14)	
互恵	平均値	1.71	2.05	1.75 n.s.
	(標準偏差)	(0.96)	(1.17)	

III. 考察

平成23年度にグループワークを導入し、各グループで話し合い、テーマを設定、検討した成果を報告するため発表会を行った。グループで課題に取り組むためには、相手の話を聞き(傾聴)そして自分の意見を述べる必要が出てくる。そして、グループ内での情報共有を行うことで課題を達成できる。毎年度、グループによって活動を行う学生と行わない学生に分かれてしまうことがあるが、活動を行わない学生が年々少しずつ減ってきている。入学年度によって学生の性質が異なっていることも考えられるが、学期が終わるごとに教員による振り返りを行い、課題を改善してきた効果が出てきていると考えられる。深津(2013)は、一人ひとりが学習意欲を持って参加することが出来れば、グループ内の関係も良好に築きあげていくことが考えられる為、動機づけが重要であると述べている。つまり、「目的」を明確にし、共通の認識を持つことが、グループワークにおいて主体的・積極的な活動につながると考えられる。

「学習ポートフォリオ」の導入は学生にとって、自分の考えを振り返り整理するのに非常に効果的であると考えられる。問題点として、「学習ポートフォリオ」を単に評価のための提出物として考えている学生がいることである。グループ活動や個人活動の時に自分で調べたことや考えたこと、他の人の意見や得られた資料をその時に「学習ポートフォリオ」へ記録しておかないと経過がわからなくなる。つまり、提出間際になって準備する学生は、資料を貼るだけのノートになってしまい、自分の活動を振り返ることが出来ない。それを改善するためには、「学習ポートフォリオ」の作成状況を定期的に確認することも必要である。

「LTD話し合い学習法」の導入から半期が過ぎたところである。この学習法は、予習とミーティングで構成され、ミーティングを行うためには予習を十分に行うことが要求される。安永(2011)によると、この学習法を体験すると、自分たちの力だけで学べたという達成感を仲間とともに味わうことができ、学ぶ面白さや喜びを実感できるようになる。予習を行って行くことが出来るか、話し合いが進むか懸念されるところであったが、講義を重ねるごとに改善していった。しかし、活発な話し合い(ディスカッション)とまではいかず、教員によるファシリテーションが必要となった。また、前半で行った「LTD話し合い学習法」の成果を後半で活かすことが出来ていなかった。今後は、前半が終了した後も「LTD話し合い学習法」で修得したことを意識させながら進めていく必要がある。

また、平成25年度前期に行ったアンケート調査結果は、

協同作業に対する意識の変化には有意差が見られない結果となった。この結果を踏まえ、グループワーク導入の効果について、学生の記録とアンケート調査から考察していく。

1. 学生の記録

学習ポートフォリオ及び個人レポートから、グループワークについての記述を抜き出した(表7)。

表7 グループワークに関する記述

基礎演習によってグループ活動の大切さを改めて実感した。人任せにせず自分の意見を述べることで情報交換をすることで知識が増え、また、グループ活動のためコミュニケーションの大切さを実感した。
グループワークの難しさ、意見などを出し合うときの積極性の弱さなど、自分自身のこれからの課題が分かった。そして、グループで協力し合い、発表を作り上げていく過程で、様々な意見が挙がり、お互いに発想を刺激しながら広げていく楽しさも知ることが出来た。
グループ活動を好まなかったが、この発表会でグループ活動の楽しさや素晴らしさに気づくことが出来た。また、自分が持っている(知っている)情報を人と共有することによって、自身の成長を大きく促していることを大いに感じる事が出来た。
グループの団結力もあり、最後までみんなで協力して作業することが出来た。最初に決めた目標は達成できたと思う。一人一人が自分の意見を主張し、それをまとめて発表できたし、課題も必ずやり順調に作業を進めていくことが出来た。

グループワークの難しさや大切さ、皆で協力しながら同じ目的に向かって作業を行うことで得られる達成感が記述されていた。これらの記述から、グループワーク導入による協同作業に対して、肯定的な効果はあったと考えられる。

2. アンケート調査結果より

今回のアンケート調査結果では、「協同効用」・「個人志向」・「互恵懸念」の3因子について有意差は見られなかった。この結果より、次のことが考えられる。

1) 協同作業に対する意識の高さ

調査結果より、「協同効用」の得点が受講前後で4.4以上と高く、もともと協同作業に対して肯定的であるため、グループワークの効果が表れにくいと考えられる。また、「協同効用」の得点が高い理由として、1年次の教養演習でグループワークを行うことによる協同作業に対しての、肯定的な意識の高さが2年次でも持続していると考えられる。

2) アンケート調査の実施時期

長濱ら(2010)は、対話中心授業(以下、対話群)と講義中心授業(以下、講義群)において授業前後における協同作業に対する意識変化を測定した。その結果は、対話群の方が講義群に比べて協同効用因子の得点が優位に高まり、個人志向因子において優位に低まることを示している。今回の演習は、「グループワーク」・「講義形式」・「グループワーク」の3つのパートに分けているため、グループワークの効果を測定するためには、各パートの前後に行うことが必要であると考えられる。

IV. おわりに

平成23年度より、「診療情報管理系基礎演習」にグループワークを導入することで、チームワークについての理解、自ら主体的・積極的かつ創造的に学ぶ方法について取り組んだ。学期が終わるごとに、教員による講義の振り返りを行い、課題を検討し次学期に改善を行っていった。その過程で「グループワーク」・「学習ポートフォリオ」・「LTD話し合い学習法」などの手法を導入してきた。グループワークにより、他者の意見への傾聴・自分の意見の発言については改善が見られるが、まだ主体的・積極的な活動に至っていないことが大きな課題である。「求められる診療情報管理士」を育成するために、今後も主体的・自律的に学び、そして活動できるような演習のあり方を工夫することが検討課題である。

引用・参考文献

- 一般社団法人日本病院会(2012)『診療情報管理士テキスト 診療情報管理Ⅲ 専門・診療情報管理編』, 一般社団法人日本病院会
- 上門要, 大城真理子, 木村堅一, 真喜屋尚美(2012)「診療情報管理専攻の大学生を対象とした基礎演習におけるグループワーク導入の試み」, 『診療情報管理(第38回日本診療情報管理学会学術大会)』, 24, 2, pp.281
- 上門要, 大城真理子, 木村堅一(2013)『診療情報管理系基礎演習における「LTD話し合い学習法」導入への取り組み』『診療情報管理(第39回日本診療情報管理学会学術大会)』, 25, 2, pp.301
- 小松秀樹(2007)『医療の限界』, 新潮社
- 佐久本功達, 天願健, アラスーン・ピーター, 中里収, アリ・ファテヘルアリム, 清水則之(2011)「高等教育におけるSNS活用方法についての検討」『名桜大学紀要』, 16, pp.29-46
- 駿台教育研究所, 産経新聞社(2012)『「時代が求める

- 人材像」に関する調査結果』<http://www.sundai-kyouken.jp/pdf/research2012.pdf> (2013年11月28日アクセス)
- 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2013年11月28日アクセス)
- 長濱文与, 安永悟, 関田一彦, 甲原定房 (2009) 「協同作業認識尺度の開発」『教育心理学研究会』, 57, 1, pp.24-37
- 長濱文与, 安永悟 (2010) 「大学生の協同作業に対する認識の変化：一対話中心授業と講義中心授業を対象に－ (<特集>協働)」『人間関係研究』, 9, pp.35-42
- 名桜大学 『大学概要2013-2014』 http://www.meio-u.ac.jp/01gaiyou/meio_university_guide2013.pdf (2013/11/28アクセス)
- 深津達也 (2013) 『「協同学習」を取り入れた大学教職授業の成果と課題』『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』, 10, pp.121-133
- 安田利枝 (2008) 「LTD話し合い学習法の実践報告と考察：学ぶ楽しさへの導入という利点」『嘉悦大学研究論集』, 51, pp.117-143
- 安永悟 (2006) 『実践・LTD話し合い学習法』, ナカニシヤ出版
- 安永悟 (2011) 「新しい教育方法の提案：～学び合いの学習」『JUICE Journal』, No.3, pp.2-7
- 安永悟 (2012) 『活動性を高める授業づくり：協同学習のすすめ』, 医学書院

**A Report on the Introduction of the Learning through
Discussion (LTD) Method in the Health Information
Management Basic Seminar Group Work**
—— Fulfilling the Educational Needs of Health Information Managers ——

UEJO Kaname, OSHIRO Mariko, KIMURA Kenichi

Abstract

This study is a practical report on the introduction of group work in the Health Information Management Basic Seminar offered to the sophomores of the Faculty of International Studies at Meio University. In order to develop human resources demanded by society, we introduced group work in 2011. We found that the work burden had concentrated on a specific student in some groups. In order to improve, in 2012 we introduced a learning portfolio so as to promote individual student activities and to evaluate the activities of individual students. Using learning portfolios enabled students to understand themselves objectively, and teachers were able to know each student's multipronged learning activity. Furthermore, it became clear that many students were not utilizing enough of the information they acquired. As a result of the introduction of the LTD discussion learning method in 2013, improvement in the status of student homework was observed. In the future, we will consider this learning method with a focus on cooperation.

Keywords: cooperation, cooperative learning, group work, LTD, leadership